

***** 2008.9.26 発行 *****

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。

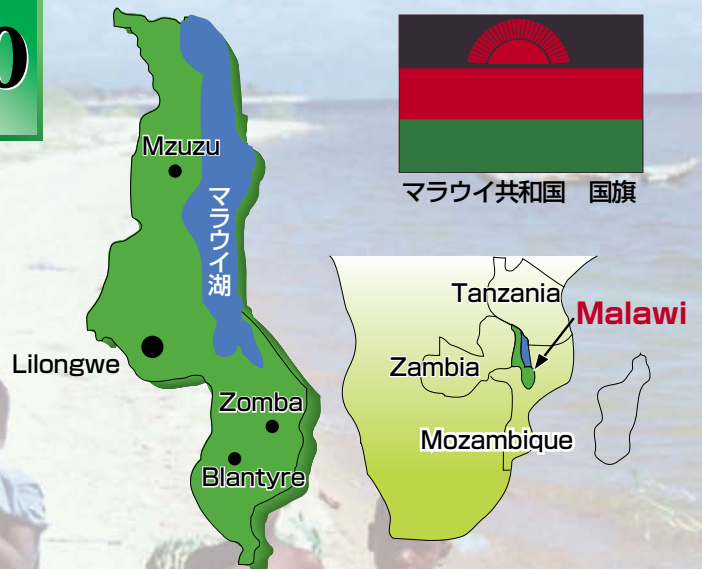
編集・発行：日本マラウイ協会
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24 青年海外協力協会気付
Tel. 03-3447-2921 Fax 03-5798-4269
Home Page <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>
E-mail japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

【マラウイ共和国】

面積:118,484平方km(日本の約1/3)
人口:1360万人(2006年世界銀行)、首都:リロングウェ
独立:1964年7月6日、公用語:英語、チェワ語
政体:共和制、大統領:ピング・ワ・ムタリカ
為替レート: US\$1=MK145.931(9月9日現在)
MK1=0.79890円(9月9日現在)

【日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan)】

日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。会員数:266人(9月1日現在)



日本マラウイ協会設立25周年 機関紙KWACHA第40号記念寄稿

日本マラウイ協会は1983年2月26日に設立されてから今年で25周年を迎えた。また機関紙KWACHAは今号で40号を迎えた。これを記念して3人の寄稿を掲載する。

■日本マラウイ協会会長 数原孝憲



人々との架け橋を目指して汗を流している会員の皆さん、協会設立25周年・KWACHA第40号発行おめでとう。

この記念すべき四半世紀の節目に当り、これまでの協会の歴史と成果を想起しつつ共に慶び、これからの更なる発展に向けて思いを新たにしたいと思います。

マラウイ協会は、故ト部敏男初代会長の下、1983年2月に設立され、同年11月、機関誌KWACHA第1号を発行致しました。文字通り当協会のKwacha(チェワ語の「夜明け」)です。それから四半世紀、当協会は秋山忠正第2代会長に継承され、私は1999年に第3代会長

となりました。この間、会員の皆さんの献身的な熱意と企画実行力で持続して発展を続け、KWACHAも第40号を重ねるに至っています。

このような輝かしい歴史の後を振り返って見ますと、そこには、日本・マラウイ両国政府、両国大使館、国際協力事業団(JICA:現独立行政法人国際協力機構)始め青年海外協力協会、アフリカ開発協会その他多くの関係諸団体各位の変わらない支援があります。その中であって、当協会活動の原動力となっているのが、青年海外協力隊のマラウイ派遣OB・OGの熱意とマラウイの人々への愛情です。楽しみながら、仕事と両立させている皆さん一人一人に心から敬意を表します。

他方、アフリカの直面する紛争、災害、疾病、貧困などの諸問題に対する国際社会そしてわが国の理解と支援はここ数年顕著に進展し、平和や民主化、生活改善、教育増進、資源開発、高

い経済成長率などの明るい兆しが見られます。特に、本年5月横浜で開催された第4回アフリカ開発会議には多くのアフリカ首脳が出席し、7月の洞爺湖G8サミットではアフリカの諸問題が重要なテーマとなりました。2008年は「日本・アフリカ交流年」と位置付けられています。

このような機運の中でマラウイを取り巻く情勢も年々改善され、わが国との関係においても、本年、在マラウイ日本国大使館美術館が開館し初代野呂元良専任大使が着任されました。今後、マラウイ国との交流と相互理解が一層深められると期待されます。私共としても、「シマを食べる会」「グローバルフェスタへの参加」などの恒例イベントのほか、機関紙KWACHAの発行、更には「ウオームハート・プロジェクト(現役協力隊員のボランティア活動への資金支援)の継続など、次の四半世紀に向け両国の関係の更なる強化に努めましょう。会員各位の一層のご支援を期待します。

■駐日マラウイ国大使 Roosevelt Laston Gondwe



CONGRATULATORY MESSAGE TO THE MEMBERS OF THE MALAWI SOCIETY OF JAPAN ON THE 25TH ANNIVERSARY OF THE SOCIETY

I am honored and privileged to be asked to contribute a message of goodwill in the "KWACHA" bulletin on the auspicious occasion of the Society's 25th Anniversary.

The Malawi Society of Japan was founded twenty five years ago to promote understanding between Malawi and Japan and to contribute to the prosperity of both countries through, among other areas: cooperation in culture, sports, economy and technology.

In your 25 years of existence, you have demonstrated that your objectives are achievable. You have as a Society:

- Organized seminars and lectures;
- Organized the annual "Nsima Party" at which the Malawi

Ambassador gives a lecture and participates in a party celebrating Malawi's National Day with the members of the Society, Malawi diplomats and their families and Malawians living in Japan;

- Published bulletins, reports of seminars and other publications including the "Kwacha" bulletin, and Chichewa-Japanese Dictionary which is instrumental to Japanese going to Malawi; and
- Participated in exhibitions like Africa Festa and Global Festa where you have exhibited many products including Malawi products and literature.

On behalf of my Government and on my own behalf, I congratulate you on these achievements on your 25th Anniversary. The Malawi Government is very thankful for the great work that the Society is doing to promote Malawi in Japan.

Since the Government of Japan started sending JOCV members to Malawi in 1971, 1, 390 Japanese volunteers have participated in the programmes making Malawi the highest recipient of Japanese volunteers in Africa.

We support the contribution of senior volunteers to our development efforts and the contribution of a former Japanese volunteer, Mr. Kohei Yamada, an artist, who worked with Malawi artists, and sang a song on HIV/AIDS prevention "Ndimakukonda".

Whilst I am aware that Japanese volunteers continue to go to Malawi, I wish to urge the members of the Society to re-double efforts in promoting Malawi in Japan. All of you are Malawi's Ambassadors to Japan. We cannot manage to visit each town and prefecture in Japan, but with the thousand plus Japanese volunteers that have come back home, I am sure that these are better placed to continue promoting the "Warmth of Malawi" in Japan, as diplomats in Japan.

In 2008, Japan established a resident Embassy in Malawi. His Excellency Ambassador Motoyoshi Noro is the first Ambassador of Japan to Malawi. We wish him well to strengthen the Malawi Japan friendship.

Malawi continues to be a stable country and has been making

■JICAマラウイ事務所長 水谷恭二



日本マラウイ協会設立25周年・KWACHA第40号 どうもおめでとうございます。25年の長きに渡り、毎月の例会、シマを食べる会や日比谷公園のグローバルフェスタ等の活動を推進して来られた方々、本当におつかれさまです。[継続は力]と申しますが、皆様の地道なご努力、熱い思い、惜しみなく捧げる時間、労力、が集まらなければ、25年を迎えることはなかったでしょうし、マラ

ウイの知名度もここまで上昇しなかったことと思います。

東京での行事に加えて、2000年から「マラウイ・ウォームハート・プロジェクト」にて、後輩たち、現役の隊員への支援を行っていただき、「学校校舎の修復・改善」「実験室建設」「図書室蔵書購入」「手押しポンプの井戸建設」が実施されました。加えてWFPを通じての食糧支援も行う他、本邦の社会福祉団体からの支援金の橋渡しなど、日本とマラウイをつなぐ活動を活発に行っておられますこと、厚く御礼申し上げます。自分自身がマラウイ隊員OBであり、かつて

remarkable efforts to fight poverty. For those volunteers that have recently come back from Malawi, they can agree with me that Malawi's development agenda of transforming the country from being a predominantly importing and consuming economy to a predominantly manufacturing and exporting economy is on track, partly due to the assistance that we have received from friendly development partners like Japan.

Finally, let me once again extend heartfelt congratulations to the Society on its 25th Anniversary and for the "Kwacha" bulletin in its 40th publication.

Once again, my Government does recognize and commend the great work that the Society is doing and continues to do. Please keep up the good work for the mutual cooperation and benefit of our two countries.


Roosevelt Laston Gondwe.
AMBASSADOR

は、行事の準備やKWACHAの編集にもかかわったことから、25周年40号と伺い、その重みをずしりと感じつつ、あれこれ記憶を探り、懐かしんだ次第です。

援助、貿易、投資の3点セットが、発展の原動力と考えますが、マラウイからの輸出やマラウイ企業との合併や共同経営など、第二の故郷マラウイでの起業を夢見る帰国隊員への支援制度の創設はいかがでしょうか? 「植林・薪炭販売」「灌漑ポンプ屋」「一村一品産品創出」などビジネスチャンスがあるのではと考えております。日本マラウイ協会の益々のご発展を祈念します。

ニュース

第26回通常総会 理事会開かれる

日本マラウイ協会の第26回通常総会が2008年5月10日(土) 15:00から、東京・渋谷区のJICA地球ひろばセミナールームで開かれた。

第1号議案では平成19年度事業報告と決算報告が行われた。活動は広報活動、文化活動、国際協力活動、組織活動の4分野が柱となっており、機関紙発行、グローバルフェスタ2007参加、マラウイ独立43周年記念国情セミナー/シマを食べる会(懇親会)開催など、平成19年度の活動とそれに伴う決算、会計監査結果が報告された。

第2号議案の平成20年度事業計画と予算案では、基本的に前年度と同様に広報活動、文化・交流活動、国際協力活動、組織活動を中心に活動を展開していくことが示された、これに関し、主なものとして以下のような意見が出された。

- マラウイに「マラウイ日本協会(仮称)」をマラウイ側が立ち上げることへの支援を行う。
- 7月に理事会を開催し、会員増加策の計画と同補正予算を組む。

第1~2号議案は質疑応答の後、議長が一同に諮り、上記意見の採択を条件に満場一致で承認された。

理事会は7月26日(土)12:45からJICA地球ひろばセミナールームで開かれた。前記総会での議決事項である会員増加策と同補正予算について議論され、次の具体策とそれに伴う補正予算が承認された。

- (1)マラウイからの全帰国隊員と現会員へ入会依頼・新会員勧誘依頼の会長文書および当会紹介パンフレット、振込用紙、機関紙KWACHA(今号)を送付する。
- (2)会員区分として学生会員の新設を来年の総会へ提案する。

イベント

国情セミナーとシマ 食べる会

日本マラウイ協会では2008年7月26日(土)、マラウイ独立44周年と当会設立25周年を記念して、国情セミナーとシマを食べる会を開催した。

国情セミナーは午後2時から、駐日マラウイ国大使 Mr. Roosevelt L. Gondweが約1時間にわたって、最近のマラウイ国内情勢や日本との関係について講演と質疑応答を行った。

午後3時から、玄関前の物故隊員慰霊碑前に集まり、Gondwe大使と数原会長が献花した後、元JICAマラウイ事務所調整員の郡昭治氏より、マラウイ在任中に亡くなった12名の隊員の名前が読み上げられ、全員で1分間の黙祷を行った。



▲ Gondwe 大使の講演を聴く参加者



▲ 慰霊碑前で

事務官の乾杯で会は始まった。

大使・大使館職員・家族・OB/OGら70名を超える参加者は、シマを食しながら独立記念日を祝い、

その後、会場を1階のレストラン「カフェ・フロンティア」へ移し「シマを食べる会」を行った。まずテーブルによるマラウイ警察音楽隊のマラウイ国歌演奏の後、数原会長の独立44周年への祝辞、Gondwe大使の答辞、チリマ参事官による大使館職員と職員家族の紹介が行われ、同参

親親を深めた。また、会の後半では、マラウイの物産・民芸品などが当たるお楽しみ抽選会が行われ、当選者は歓喜に沸いた。



▲ お開きの前の記念写真

国情セミナー要旨

■日時:2008年7月26日(土)

14:00~15:00

■場所:JICA地球ひろば2階セミナールーム

■講師:駐日マラウイ国大使

H.E. Mr. Roosevelt L. Gondwe

【数原孝憲日本マラウイ協会会長挨拶】

マラウイは東京オリンピックの年である1964年の7月6日に独立した。本日の催しはマラウイ独立44周年をお祝いするものである。今年には本協会設立25周年にあたり、TICAD IV、G8サミット、在マラウイ大使館開設、新大使の赴任といったマラウイに関するイベントの年となった。Gondwe大使にご講演をお願いいたします。

【Gondwe大使講演要旨】

自分自身、妻、大使館員、本日参加したマラウイ人を代表して、日本マラウイ協会にお礼いたします。

本日の催しは特別である。本協会の25周年にあたるのみならず、今年はTICAD IVとG8サミット

というアフリカにかかわる二つの国際会議が開催された。マラウイのビンガ・ワムタリカ大統領はTICAD IVに参加し福田総理大臣と会談した。その際、青年海外協力隊が話題になった。大統領はより多くの協力隊員の活動を希望した。総理大臣は、協力隊はTICAD IVの精神を体現したものであり良いパートナーであると話した。

TICAD IVが成功であると言える理由は、(1)多くの大統領が出席したこと、(2)開発のパートナーが実行する行動計画が成果として得られたこと、(3)各国間のパートナーシップが組織化されたことである。

総理大臣はTICAD IVで合意された課題をG8で紹介することを約束した。実際、日本はアフリカにとっての深刻な課題をG8サミットで説明した。

今年1月には在マラウイ日本大使館が新設され、今週末には新大使がマラウイに赴任する。近々マラウイにおける最初の会談が開かれるであろう。青年海外協力協会が私を名古屋に招待した際、私は野呂新大使に会った。野呂新大使は我々に好意的であり、マラウイ政府は野呂新大使を歓迎している。大統領もTICAD IV期間中に野呂新大使と夕食を共にした。

大統領はTICAD IVのあとで大分県に3日間滞在し、一村一品運動を学んだ。大統領は一村一品運動の産品に大変興味を持った。また平松元知事とも会った。さらに立命館アジア太平洋大学で貧困農村についての講演を行った。

今年1月には日本政府とマラウイ政府(正確にはJICA、マラウイ政府、在マラウイ日本大使館)は「アフリカ一歩一歩国際セミナー」をマラウイで開催した。同地域でマラウイは一村一品運動を最初に導入した国である。同セミナーに参加した諸国は一村一品運動に興味を持った。

マラウイの経済は危機を脱し成長しつつある。インフレーションは収まり、国内総生産は拡大しつつある。支援国も増加している。

農村部において水供給は深刻な問題である。多くの井戸を掘る必要があり、そのためには資金が不可欠である。農村の安全な飲料水のために日本は我々を助けてくれている。

農業部門では主食であるトウモロコシの生産が増加しつつある。マラウイは種子と肥料に多額の補助金を支給しているため、農民は安い料金を購入することができる。

政府は多くの小規模ダムによる灌漑を進めつつある。大規模な灌漑事業では日本の支援を受けて

用水路を掘っている。灌漑整備のためにはさらなる投資が必要であり、政府は日本などの支援国と協議している。

HIV/エイズの感染率は3年前では15%~14%であったが減少しつつある。それには、(1)過去と比べて一般認識が高まったこと、(2)検査が奨励され伝染する割合が減少したことなどがあろう。HIV/エイズ孤児は政府が学校や施設によって援助している。

マラリアは大きな死因となっている。マラリア対策でも蚊帳の供与などを通じて日本の援助を受けている。

インフラストラクチャーでは、明るい話題として道路網が改善されてきていることがあげられる。多くの地域が道路で直接つながり、地域経済を押し上げる役割を果たしている。南部では、最南端に近いバングラ地区に至る道路やマラウイ湖の観光地に至る道路が建設されたり修復されたりしている。中部の道路建設には病院への交通の便にとって重要なものもある。北部のムジンバ地区に至る道路は森林地域にある多くの村落をつなぐものであり、農民の産品を運ぶのに役立つものである。このような進捗が見られるが、全国を網羅する道路網の形成を目指して、他の道路の整備のために支援国や支援機関と協議を続けている。

政治面では来年が議会と大統領の両方の選挙の年である。来年の5月に選挙が実施されることが決まっている。6政党あるが、ひとつの政党はすでに大統領候補を決めている。一方、2008~2009年度の予算はまだ承認されていない。

結論として、両国の関係はいっそう深まりつつある。在マラウイ日本大使館の開設は心強い。また日本マラウイ協会も勇気づけるものである。我々は両国の良い関係が続くことを望んでいる。在マラウイ日本大使館の新設はマラウイ人の日本に対する関心を押し上げている。以前と違い、今ではマラウイで日本への旅行のビザをとることができる。これは大きな促進要因である。そのうえ両国に大使館が開設され大使が赴任することでより良い意思疎通ができるようになる。

ありがとうございます。今後のいっそうの交流を楽しみにしています。

[Gondwe大使への質疑応答]

Q 自分は近々マラウイ訪問を予定している学生ですが、マラウイ滞在中に注意することは何でしょうか。

A 夜間に一人で歩き回るのは避けた方がよいだろう。ただし質問者はムジンバにある青年海外協力協会のマラウイ農民自立支援プロジェクトの丹羽代表の所に滞在するということなので、彼が助けてくれるだろう。

Q マラウイでは義務教育の対象は何歳までですか。何人の子供が教育を受けていますか。

A 教育は義務ではない。しかし8年間の初等教育は無償である。その後は有償である(4年間の中等教育と4年間または5年間の高等教育)。初等教育は無償であることもあり、生徒数は学校の容量を上回っている。また生徒に対する教員数は少ない。

生徒があふれている状態であり学校建設のために支援国・支援機関からの援助が求められている。しかし、学校建設によってあふれている生徒数は減るだろうが、十分な教員数を確保できていないという問題は残る。教員や医師については育成しても別の職業や国外に去ってしまうという問題もある。財源は限られており教員の収入を上げることがむずかしい。現在、教室に入り切れない生徒がいることもあり、ドロップアウトの率は高い。支援機関の援助による学校給食プログラムを実施している学校もあるが、すべての学校で実施されているわけではない。1994年に初等教育が無償化されたことは良いことである。しかしそのことによる財政負担は大きい。事業家が私立小学校を開設し始めているがまだ少数であるし、授業料が高く大多数の貧困層には手が届かない。

Q 娘が協力隊員でマラウイにいるが電話による情報は不十分であり心配している。

A マラウイには電気がない地区もある。また電気はあっても停電することもある。停電は1時間のこともあるが何日か続くこともある。電力会社は1社あるだけで水力発電に頼っており停電の可能性はある。

—教原会長助言—

ご両親がマラウイを訪問されればご心配は無くなるでしょう。

●機関紙 KWACHA の歴史

機関紙 KWACHA は今回で40号を迎えた。そこで、節目の号の記事項目を掲載するとともに、マラウイと日本の当時の出来事を振り返る。



■第1号 1983年11月1日発行

(1)主な記事

- ・日本マラウイ協会設立なる
- ・ごあいさつ 会長:卜部敏夫
- ・マラウイとの出会い 副会長:秋山忠正
- ・クワチャの創刊によせて 副会長:福永英二
- ・マラウイ国紹介誌を作ろう
- ・チチェフ・日本語辞典編さんに向けて
- ・日本マラウイ協会役員一覧

(2)マラウイの出来事

- ・カムズ・バンド大統領権、マラウイ議会党一党制継続中
- ・1983年6月 国会議員総選挙

(3)日本の出来事

- ・1983年4月 東京ディズニーランド開園
- ・1983年6月 戸塚ヨットスクール事件で校長・コーチら逮捕
- ・1983年7月 任天堂ファミコン発売



■第10号 1993年3月17日発行

(1)主な記事

- ・日本マラウイ協会発足10周年に寄せて 副会長:秋山忠正
- ・査証発給開始 駐日マラウイ大使館
- ・カバロさん来日
- ・6月14日国民投票
- ・日本、難民援助資金供与
- ・QECH薬不足
- ・堀内大使信任状奉呈
- ・帰国報告 H2-2 薬剤師 徳田詠子

(2)マラウイの出来事

- ・1993年6月 国民投票実施、複数政党制へ移行
- ・1993年11月 終身大統領制廃止決議

(3)日本の出来事

- ・1993年5月 日本プロサッカーリーグ初年度リーグ戦開始
- ・1993年後半 冷夏による米不足、米騒動(タイ米輸入など)

■第20号 1998年8月19日発行



(1)主な記事

- ・KWACHA20号発刊を記念して 会長・秋山忠正
親善視察団レポート 初めてのマラウイ
事務局長・竹谷稔子
- ・国情セミナーとシマを食べる会開催
- ・9年度3次隊、10年度1次隊マラウイへ
- ・バーレンと外交関係樹立
- ・新病院完成(プランタイア)
- ・外交拠点を閉鎖
- ・インターネットホームページWorld Wildlife Gallery
について H2振替派遣 電子機器 神田君夫
- ・マラウイ関連のインターネットWebについて
63-1 無線通信機 河野進

(2)マラウイの出来事

- ・1998年4月 チベタ外相訪日
- ・1998年10月 チルンバ蔵相訪日
(第2回アフリカ開発会議)

(3)日本の出来事

- ・1998年2月 郵便番号7桁化
- ・1998年2月 長野冬季オリンピック開催
- ・1998年7月 和歌山毒物カレー事件

- ・1998年11月 通信法施行(郵便/電気通信分離、電気通信民営化)

■第30号 2003年9月24日発行



(1)主な記事

- ・フラッシュニュース
マラウイ大統領初来日!
- ・第21回通常総会開かれる
- ・国情セミナーとシマを食べる会
- ・マラウイ国情セミナー要旨
- ・シマを食べる会に参加した留学生
寄稿 PeterChikabadwa
- ・マラウイに来て1年
JICA専門家 川上康博

(2)マラウイの出来事

- ・2003年4月 ムルジ大統領、
今限りで引退表明
- ・2003年9-10月 ムルジ大統領訪日
(第3回アフリカ開発会議出席)

(3)日本の出来事

- ・2003年4月 日本郵政公社発足
- ・2003年4月 六本木ヒルズオープン
- ・2003年10月 独立行政法人国際協力機構(JICA)発足
- ・2003年10月 ムルジ大統領、日本マラウイ協会役員と接見
- ・2003年10-11月 ムルジ大統領招待による数原会長マラウイ訪問

最近のマラウイ関係記事

- (1)2008.7.6 The Japan Times 4面
Malawi Independence(駐日マラウイ大使著)
- (2)2008.7.13 日本経済新聞朝刊 23面
「あとがきのあと」～黒岩宙司OB(63-3医師)の著
書「小児科医、海を渡る」の紹介

日本マラウイ協会 2008年3月～2008年8月 主な活動内容

- (1)2008.3.26 3月定例会、機関紙KWACHA第39号発行
- (2)2008.4.19～20 第2回協力隊まつり出展
- (3)2008.4.30 4月定例会
- (4)2008.5.10 第26回通常総会(2面の記事参照)
- (5)2008.5.28 5月定例会
- (6)2008.6.25 6月定例会
- (7)2008.7.26 理事会、国情セミナー・シマを食べる会
(2～3面の記事参照)
- (8)2008.8.27 8月定例会

日本マラウイ協会情報

■ KWACHAバックナンバー

当会は今年2月26日に設立25周年を迎えましたが、設立時の機関紙KWACHA第1号から第40号(今号)までの全バックナンバーをPDFファイル化し、当会ホームページへ掲載しています。是非ご覧下さい。

URL:<http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>から「日本語」を選択、左端のメニューから「機関紙KWACHA」をクリックすると、右ページに号数一覧が出てきますので、希望の号数をクリックしてください。

■ 日本マラウイ協会の刊行物

- (1) **チェフ語辞典統合改訂版**(2000年7月発行)
B5版186ページ1部1,500円(送料290円)
- (2) **マラウイ旅行ガイド新訂第2版**(97年7月発行)「**アフリカの暖かき心、湖とサバンナの大地へ**」 B5版108ページ1部1,200円(送料210円)
- (3) **国情紹介誌「Malawi - The Warm Heart of Africa」**第2版(94年7月発行)A4版40ページ1部1,000円(送料210円)

送料は「ゆうメール(旧冊子小包郵便物)」扱いで表示しています。複数種を1冊づつご注文の場合は次のとおりです。

(1)+(2) = 340円	(1)+(3) = 340円
(2)+(3) = 290円	(1)+(2)+(3) = 340円

各書ご希望の方は、本ページ最後の入会方法の欄に記載の銀行口座宛に、代金および送料をお送り下さい。

●「ゆうちょ銀行・振替口座宛へ」払込取扱票を使って払込む場合(通常払込み)は、必ず、払込取扱票の通信欄に注文内容(希望する「刊行物名」、「部数」、「申込者の電話番号」、「発送先:振込人の住所、氏名と異なる場合」)を明記してください。なお、払込通知が当会に届くまでに日数がかかりますので、送金と同時にメールまたはFAXで注文内容をご連絡いただくと、より速く発送することが可能です。

●「ゆうちょ銀行・振替口座宛へ電信振替または電信払込で送金される場合」、および「三菱東京UFJ銀行宛へ送金される場合」は、事前に必ず注文内容(希望する「刊行物名」、「部数」、「発送先」、「申込者の氏名、電話番号」)をメールまたはFAXでご連絡ください。

■ ご意見、ご質問をどうぞ

日本マラウイ協会に対するご意見、ご要望、ご質問などありましたら、下記当協会宛へご連絡ください。また、電子メールによるマラウイ関連情報の配信も行っておりますので、電子メールアドレスをお持ちで、ご希望の方は、あわせてご連絡ください。

■ 日本マラウイ協会 月次定例会

日本マラウイ協会では、原則毎月第3水曜日18:30～に、東京都内(通常はJICA広尾：地球ひろば会議室)で、月次定例会を開催し、マラウイ関連の支援活動などについての討議や、マラウイ関係者間の情報交換などを行っております。参加は会員でなくても構いません。初めての方も大歓迎です。詳しくは当協会までお問い合わせください。

■ 日本マラウイ協会 入会方法

ご連絡いただければ入会申込書をお送りしますので、各項記入の上ご返送ください。E-Mailで入会希望の旨を連絡くださっても構いません。また、入会金と年会費の合計(個人正会員の場合1,000円+3,000円=4,000円)を下記のいずれかの銀行口座へお送りください。

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-2-24
青年海外協力協会気付
日本マラウイ協会
TEL:03-3447-2921
FAX:03-5798-4269
E-mail:japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

三菱東京UFJ銀行 東恵比寿支店 普通口座 255739
口座名義人 日本マラウイ協会事務局 貝塚光宗
ゆうちょ銀行 振替口座 00190-7-13125
加入者名 日本マラウイ協会

平成21年9月30日までは「ゆうちょ銀行ATM経由の、ご自分のゆうちょ銀行口座から当会のゆうちょ銀行・振替口座宛への電信振替」が手数料無料です。また、平成21年10月以降は「ゆうちょ銀行ATM経由の、払込取扱票での当会のゆうちょ銀行・振替口座宛への払込み」が安くて便利です。